

MR-theory の 問題集

大阪市大・理 荒木捷朗

MR-theory について, 二つの問題集を指摘したい.

$MR^{s,t}(pt)$  を決定する過程において,  $MR^{s,t}(pt)$  は associate された Forgetful spectral sequence を計算することから問題になる. この Forgetful spectral sequence  $\mathcal{X}$  は,  $\tau$ -cohomology  $h^{s,t}[2]$  において,  $\tau$ -cofibration  $S_+^{1,0} \rightarrow B_+^{1,0} \rightarrow \Sigma^{1,0}$  は任意の finite  $\tau$ -complex  $X$  に対して natural な完全列

$$\dots \rightarrow h^{p-1,q}(X) \xrightarrow{\alpha} h^{p,q}(X) \xrightarrow{\beta} h^{p,q}(S^{1,0} \times X) \xrightarrow{\gamma} h^{p-1,q+1}(X) \rightarrow \dots$$

が定まり, 一方, 自然な同型  $\beta: h^{p,q}(S^{1,0} \times X) \cong \mathcal{Y}h^{p,q}(X)$  があり,  $\beta \circ \alpha = \mathcal{Y}: h^{p,q}(X) \rightarrow \mathcal{Y}h^{p,q}(X)$  は忘却準同型になる.

そこで上の完全列は忘却完全列と呼ばれるが, ことで

$$D_1^{p,q}(X) = h^{p,q}(X), \quad E_1^{p,q}(X) = h^{p,q}(S^{1,0} \times X)$$

における, 上の完全列は完全対 (bigraded) を与え, 従って  $\mathcal{Y}$  のコホモロジー系列  $E_r^{p,q}(X)$  が定まる. これは  $h^{s,t}(X)$  は associ-

10

ate さした forgetful spectral sequence と呼んでゐる。

所て、一般の forgetful spectral sequence の  $E_r$ -項は次の  
ような periodicity を有する。今、 $h^{p,q}$  は乗法的であるとする  
は、

$$u_r \in E_r^{a_r, -a_r}(pt)$$

で  $u_r$  は乘法逆元  $u_r^{-1}$  がある。そこで同型

$$\omega_r: E_r^{p,q}(X) \cong E_r^{p+a_r, q-a_r}(X), \quad \omega_r(x) = u_r \cdot x,$$

が成立する。これは  $E_r^{p,q}(X)$  の periodicity 同型と見なす。ここで、

$$a_r = 2^{\varphi(r-1)},$$

$$\varphi(k) = \#\{s \in \mathbb{Z}; 0 < s \leq k, s \equiv 0, 1, 2, 4 \pmod{8}\}$$

である。実際  $u_r$  は既約な Clifford 加群を用いて作られる。

一般に、全射

$$\lambda_r: h^{p,q}(S^{r,0} \times X) \rightarrow E_r^{p,q}(X)$$

が存在し [1]、一方既約な Clifford 加群を用いて  $r$ -同相

$$S^{r,0} \times (B^{a_r,0}, S^{a_r,0}) \cong S^{r,0} \times (B^{0,a_r}, S^{0,a_r})$$

を得る。これは懸垂同型と見なす。元

$$\bar{u}_r \in E_r^{a_r, -a_r}(S^{r,0})$$

を得る。  $\lambda_r(\bar{u}_r) = u_r$  とおく。  $u_r$  の可逆性は  $\bar{u}_r$  の

それから従ふ。  $\bar{u}_r$  の逆元はその定義と逆向きにして考へれば  
得られる。

一般には  $(a_r, -a_r)$  が最小周期のようには思ふべき (証明は存

い), この一般的周期性は  $R^{s+1}(S^{r,0})$  の乘法可逆元  $\bar{w}_r$  から得られたことを先づ注意しておく.

したがって,  $MR^{s+1}(X)$  に associate された forgetful spectral sequence においては, より小さな周期を  $r$  の周期性同型が成立す. 即ち, 乘法的可逆元

$$w_r \in E_r^{b_r, -b_r}(pt)$$

がある.  $r=2^s$

$$b_r = 2^s, \quad 2^s \leq r < 2^{s+1} \text{ のとき,}$$

である. 一般には  $b_r \leq a_r$  である.

$$a_r = b_r \iff r = 1, 2, 4, 8$$

となることは容易にわかる. 又, この現象は MR-theory に限らず, 一般に real-complex vector bundle (Atiyah の意味での real vector bundle) に対して自然且つ乘法的な orientations を  $r$  の  $r$ -cohomology なるような小さな周期を  $r$  の周期性同型が成り立つ. 従って,  $S^{r,0}$  上の real-complex vector bundles の Thom class を用いて  $w_r$  が実現出来るように思われるが, このことは一般には明らかでない.  $r=2$

問題 1. MR-理論において, 乘法的可逆元

$$\bar{w}_r \in MR^{b_r, -b_r}(S^{r,0})$$

があるか? (仮しは必然的に  $\lambda_r(\bar{w}_r) = \pm w_r$  となる)

上の  $\bar{w}_r$  を探す問題は,  $MR^{p+q}(S^{r,0})$  を計算するために必要である. 次は  $MR^{p+q}(S^{r,0})$  を計算することと, その一般的な意味をえつかを考えていく.

$r > 0, s > 0$  に対して, 自然な包含

$$S^{r,0} \subset S^{r+s,0}$$

を考える. 簡単な考察で,  $\tau$ -同相

$$S^{r+s,0}/S^{r,0} \approx \Sigma^{r,0}(S_+^{s,0})$$

が得られる. 従って,  $\tau$ -cofibration

$$S_+^{r,0} \xrightarrow{\eta_{r,r+s}} S_+^{r+s,0} \xrightarrow{\xi_{r+s,s}} S^{r+s,0}/S^{r,0}$$

は,  $X$  について自然な完全列

$$\begin{aligned} \cdots \rightarrow MR^{p-r,q}(S^{s,0} \times X) &\xrightarrow{\xi_{r+s,s}^+} MR^{p,q}(S^{r+s,0} \times X) \\ &\xrightarrow{\eta_{r,r+s}^+} MR^{p,q}(S^{r,0} \times X) \xrightarrow{\delta_{s,r}} MR^{p-r,q+1}(S^{s,0} \times X) \rightarrow \cdots \end{aligned}$$

が得られる. 特に  $X = pt$  のとき, この完全列を利用して  $MR^{p+q}(S^{r,0})$  を計算することとを考える.  $r=1, 2, \dots$ ,  $\infty$  次々に計算して行くのである.

$a_1 = b_1, a_2 = b_2$  があったから,  $\bar{w}_1 = \bar{u}_1, \bar{w}_2 = \bar{u}_2$  としてよいことに先づ注意する.

殆んど自明な同型

$$MR^{p,q}(S^{1,0} \times X) \approx MU^{p+q}(X)$$

(このことは  $\Psi MR^* = MU^*$  であることより示す)より,

$$MR^{*,*}(S^{1,0}) = MR^*(pt) [\bar{w}_1, \bar{w}_1^{-1}]$$

であることがわかる。但し

$$MR^*(pt) = \sum_n MR^{n,0}(pt) \approx MU^{ev}(pt).$$

次に  $MR^{*,*}(S^{2,0})$  を計算するのには、前の完全列を  $r=s=1$  として用いる。  $MR^{*,*}(pt)$  の forgetful spectral sequence の計算(の生体)より、

$$\delta_{1,1} \bar{w}_1 = \pm 2, \quad \delta_{1,1} \bar{w}_1^2 = 0$$

がわかる。又  $\eta_{1,2} \bar{w}_2 = \pm \bar{w}_1^2$  である(この種の操作は周期性元については常に成立する)とこの完全列が計算でき、次の定理を得る

定理 1.  $MR^{*,*}(S^{2,0}) = MR^*(pt) [\bar{w}_2, \bar{w}_2^{-1}] [\xi_{2,1}^+ \bar{w}_1, \alpha] / I$ ,  
但し、  $I = ((\xi_{2,1}^+ \bar{w}_1)^2, 2\alpha, \alpha^2, (\xi_{2,1}^+ \bar{w}_1)\alpha)$ ,  $\xi_{2,1}^+ \bar{w}_1 \in MR^{2,-1}(S^{2,0})$ ,  $\alpha = \chi(1) \cdot 1 \in MR^{1,0}(S^{2,0})$ .

次に  $MR^{*,*}(S^{3,0})$  を計算するのがあるが、 $\bar{w}_3$  がまだ作れない。先づ  $\bar{w}_3$  を作る。

$CP_1 = S^2$  上の Hopf bundle を考へるのには、その principal  $\mathbb{C}^*$ -bundle は

$$\begin{array}{ccc} \mathbb{C}^2 - \{0\} & \longrightarrow & CP_1 \\ \downarrow & & \downarrow \\ (z_1, z_2) & \longmapsto & [z_1, z_2] \end{array}$$

で与える。この  $\mathbb{C}^2 = \mathbb{H}$ , 4元数体, と同一視すると、

$\mathbb{C}^{1,2} - \{0\} = \mathbb{H}^+ \setminus \tau$ , Hopf principal  $\mathbb{C}^+$ -bundle is

$$h: \mathbb{H}^+ \xrightarrow{\pi} \mathbb{C}P_1$$

と  $\tau$ ), right  $\mathbb{C}^+$ -action is " $q \mapsto qz$ "  $\tau$ -invariant is,  $z \in \mathbb{C}$

$$\eta^+ = \mathbb{H}^+ \times_{\mathbb{C}^+} \mathbb{C}$$

is Hopf line bundle  $\tau$  is.

$$J: \eta^+ \rightarrow \eta^+$$

is  $J(q, \zeta) = (-qj, \bar{\zeta})$ ,  $q \in \mathbb{H}^+$ ,  $\zeta \in \mathbb{C}$ , is defined as,

$J$  is  $\eta^+$   $\tau$ -fibers  $\tau$ -fibers is  $\tau$ -equivariant,  $\mathbb{C}P_1$   $\tau$ -involution  $\tilde{J}$  is induced as.  $\tau$ -equivariant  $(\mathbb{C}P_1, \tilde{J}) \approx S^{3,0}$  is easily obtained. Also,  $J$  is  $\eta^+$   $\tau$ -fibers  $\tau$ -conjugate linear is action

(1)  $J^2 = -1$  is. It is symplectic-complex line bundle

$$(\eta^+, J) \rightarrow S^{3,0}$$

is obtained as. is a bundle is, also is Dupont [3] is KR-theory is research is used is.

$(\eta^+ \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H}, J \otimes j)$  is considered. But  $j$  is  $\mathbb{H}$   $\tau$ -left multiplication is,  $(J \otimes j)^2 = 1$  is,  $\tau$ -invariant is.

$$(\eta^+ \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H}, J \otimes j) \rightarrow S^{3,0}$$

is  $S^{3,0}$  is a real-complex 2-vector bundle is. is a MR-Thom class is

$$t_{MR}(\eta^+ \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H}) \in \widetilde{MR}^{2,2}(M(\eta^+ \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H}))$$

とある。

$$\eta^* \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H} = (\mathbb{H}^+ \times_{\mathbb{C}^+} \mathbb{C}) \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H} = \mathbb{H}^+ \times_{\mathbb{C}^+} \mathbb{H}$$

とある:  $\chi$  は注意 1,

$$\chi: \mathbb{H}^+ \times_{\mathbb{C}^+} \mathbb{H} \rightarrow S^{3,0} \times \mathbb{H}$$

と  $\chi(q, q') = (\pi(q), qq')$  とする。  $\chi$  は実 vector bundle

と同型で、  $S^{3,0} \times \mathbb{H}$  の  $\mathbb{H}$  には自明な involution  $\tau$  とする

$\chi$  は  $\tau$ -map とする。  $\rho$  と

$$\chi: (\eta^* \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H}, J \otimes j) \approx S^{3,0} \times \mathbb{R}^{0,4},$$

involution  $\tau$  と real vector bundles の同型。  $\rho$  と

$$\tilde{\chi}: M(\eta^* \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H}) \approx S_+^{3,0} \wedge \Sigma^{0,4},$$

$\tau$ -同相, 対応がある。  $\rho$  と

$$\begin{aligned} \widetilde{MR}^{2,2}(M(\eta^* \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H})) &\stackrel{\tilde{\chi}^+}{\approx} \widetilde{MR}^{2,2}(S_+^{3,0} \wedge \Sigma^{0,4}) \\ &\stackrel{\rho^{0,4}}{\approx} \widetilde{MR}^{2,-2}(S_+^{3,0}) = MR^{2,-2}(S^{3,0}). \end{aligned}$$

と 同型合成による  $t_{MR}(\eta^* \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H})$  の像  $\tau$

$$\bar{w}_3 \in MR^{2,-2}(S^{3,0})$$

とある。

次の同型合成

$$\begin{aligned} MR^{p,q}(S^{3,0} \times X) &\approx \widetilde{MR}^{p+2,q+2}(M(\eta^* \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H}) \wedge X_+) \\ &\stackrel{\tilde{\chi}^+}{\approx} \widetilde{MR}^{p+2,q+2}(S_+^{3,0} \wedge \Sigma^{0,4} \wedge X_+) \\ &\stackrel{\rho^{0,4}}{\approx} MR^{p+2,q-2}(S^{3,0} \times X) \end{aligned}$$

(但し  $\rho$  の合成は  $\eta^* \otimes_{\mathbb{C}} \mathbb{H} \times 1$  の Thom 同型) による, (1)

型

$$MR^{p,q}(S^{3,0} \times X) \approx MR^{p+2, q-2}(S^{3,0} \times X)$$

が常に成立するが、この同型は  $\bar{w}_3$  と  $\tau$  の性質から得られることは容易にわかる。よって  $\bar{w}_3$  は乗法可逆元  $\tau^{-1}$  のほか本質的な  $\tau$  の因子は存在しない。

$\tau^2 = 1$  より、前記の  $\tau$  は完全列  $\tau \rightarrow \tau^2 = 1 \rightarrow \tau \rightarrow \tau^2 = 1 \rightarrow \tau \rightarrow \dots$  が成り立つ。  $\eta_{2,2}^+ \bar{w}_3 = \pm \bar{w}_2$  となり、又 forgetful spectral sequence より  $\delta_{1,2}^+ \xi_{2,1}^+ \bar{w}_1 = \pm 2 \tau \bar{w}_1$  である。よって  $MR^{p,q}(S^{3,0})$  が  $\tau$  等分される。

定理 2.  $MR^{p,q}(S^{3,0}) = MR^p(\mathbb{Z})[\bar{w}_2, \bar{w}_3^{-1}][\xi_{3,1}^+ \bar{w}_1, \beta]/J$ ,  
 但し  $J = ((\xi_{3,1}^+ \bar{w}_1)^2, 2\beta, \beta^3, (\xi_{3,1}^+ \bar{w}_1)\beta)$ ,  $\beta = \chi(1) \cdot 1 \in MR^{1,0}(S^{3,0})$ ,  $\xi_{3,1}^+ \bar{w}_1 \in MR^{3,-1}(S^{3,0})$ .

有限 CW 複体  $X$  に対し、自明な involution  $\tau$  を

$$L^+(X) = MR^{p,q}(S^{3,0} \times X) / \sim$$

とおく。但し、 $\sim$  は周期性同型 ( $\bar{w}_3$  と  $\tau$ ) の  $\tau$ - $\mathbb{Z}$ - $\mathbb{Z}$ -relation である。すなわち、 $\sim$  は bidegree を変化する  $\tau$  の  $\mathbb{Z}$ - $\mathbb{Z}$ -relation である。よって  $L^+$  は half-exact functor  $\tau^{-1}$  であり、 $\deg(\bar{w}_3) = (2, -2)$  であり、 $\tau$  の  $\sim$  は total degree を変化する。よって  $L^+$  は total degree  $\tau$ -graded である。容易にわかるように、 $L^+$  は (-3)-connected な multiplicative cohomology theory である。

$X$  上の  $\mathbb{H}$ -vector bundle  $E$  に対し、同相  $X$  が拡張定義  $\pm$



れ, involution  $\tau$  を  $\mathbb{R}$  実 vector bundle  $\alpha$  の型

$$\chi_E = \eta^* \hat{\otimes}_{\mathbb{C}} E \approx S^{3,0} \times E$$

を得る。但し,  $\tau$  は  $\alpha$  の  $E$  に  $j$  が  $\tau$  を act し, 右側  
の  $E$  は trivial involution  $\tau$  を受ける。すなわち,  $\tau$ -同相

$$\widehat{\chi}_E = M(\eta^* \hat{\otimes}_{\mathbb{C}} E) \approx S^{3,0}_+ \wedge ME$$

を得る。又

$$(\widehat{\chi}_E^+)^{-1}(t_{MR}(\eta^* \hat{\otimes}_{\mathbb{C}} E)) \in MR^{2n, 2n}(S^{3,0}_+ \wedge ME)$$

は  $L^{4n}(ME)$  における  $\tau$  を受ける  $E$  の  $L^+$ -Thom class  $\tau$  の類  $\tau$  を  
生成する。すなわち  $L^+$  は symplectic-oriented.  $\tau$  は  
 $\tau$  multiplicative, orientation-preserving natural transformation

$$\nu: MSp^+ \rightarrow L^+$$

を得る。  $KR^{+,+}(S^{3,0} \times X) \simeq KO^+(X)$  と同値。及  $n$

Fujii [4] の natural transformation

$$\gamma: MR^{+,+} \rightarrow KR^{+,+}$$

を用いて  $\tau$  の定理を得る。

定理 3.  $\nu$  は Conner-Floyd map  $MSp^+ \rightarrow KO^+$  及び  
忘却写像  $MSp^+ \rightarrow MU^+$  を factorise する。

よって,  $L^+$  は  $MSp^+$  を  $\tau$  を受ける  $\tau$  の有力手段として得る  
ことが出来る。

問題 2.  $\nu(\mu t) : MSp^+(\mu t) \rightarrow L^+(\mu t)$  を用いる方法  
を考へよ。

$L^+(pt)$  は定理 2 からすぐわかることを注意しておく。この形からみて、 $L^+$  は  $KO \wedge MU$  にかなり近いように見える。  $L^+$  から  $MSP$  に関する information が  $KO \wedge MU$  以上のものが得られることは、更に  $MR^{p,q}(S^{p,q})$ ,  $p \geq 4$ , を計算してみること、 $L^+$  より  $MSP$  に近いものが得られるかどうか?  $a_4 = b_4$  であるから、 $\bar{w}_4 = \bar{u}_4$  なら、 $MR^{4,0}(S^{4,0})$  の計算はそれほど困難でない筈である。

最後に、 $L^+$  と  $KO^+$  の異なる cobordism analogue を見たい。また、 $MR^{p,q}(S^{2,0} \times X)$  の periodicity  $\tau$  に関する (2) 得られる cohomology は、 $KSC^+$  の異なる cobordism analogue を見られるであろう。(  $MR^{p,q}$  は  $KR^{p,q}$  の cobordism analogue をみるに同値な意味で )。

以上。

### 文献

[1] S. Araki, Forgetful spectral sequences (to appear in Osaka J. Math.)

[2] S. Araki and M. Murayama,  $\tau$ -cohomology theories, Japanese J. of Math., N.S., 4 (1978) (to appear).

[3] J. L. Dupont, Symplectic bundles and KR-theory, Math. Scand. 24 (1969), 27-30.

[4] M. Fujii, On the relation of real cobordism to KR-theory, Math. J. Okayama Univ., 19 (1977), 147-158.